

走している。ワラ葺きの家どこも手狭で竹で編んだ床、その上をむしろで履う、ランプの火がゆらゆら照る。勉強に決って満足する環境で無い。

良くソーマンチャンプルーに舌鼓みをうちながら談笑の間をかいまみる。そのおこぼれにあづかって嬉しかった。

病院に勤務して十九年になり人生もすでに半ばにきた。一教室を一人の先生が三学級同時に教える複式授業、生徒の自主性にゆだねられた学習風景、学校行事、後輩の指導と体験的学習が私達を培った。そのすべてが力となってみなぎっている。社会人としてあらゆる試練に立ち向う勇氣、めったなことではくじけない精神力、常に先駆者になれ、先生からよく聞かされた言葉で印象に残っている。

自我自賛になるかもしれないが、精神医学的作業療法士の資格を得る為、血のにじむ努力を傾注して難関の国家試験をパスした。これからも恵まれない精神障害者の治療訓練に励みたい。子供の頃大自然に向って冒険につぐ冒険、運命共同体で開拓の意気に熱えた人々、現在農業に勤む人々、やむなく離村した人々、皆んなの顔が走馬燈のごとく頭を駆け巡る。寸土に大勢の人達がしがみついて貧乏するより残された人々が大規模農業に転じるほうがより自然かもしれない。

現在も農業に勤む米原、富野の皆様我心より敬服いたします。

富野小中学校創立三十周年おめでとうございます。

創立三十周年を迎えて

独立校第二期生 島 仲 重 雄

この度、富野小中学校が輝かしい三十周年の節目を迎えるにあたり、卒業生として私にも思い出やエピソードを寄稿するよう依頼がありましたので、創立当時のことを思いつくままつづつてみました。

私が川平小中学校富野分校に通う様になったのは、小学校三年に進級した四月の中旬からであります。母と姉と弟と私の四名は川平に居て、年老いた祖母と病弱な父が富野に居たからである。時代が遠くなり月日は定かでないが、ある日、富野の親せきが川平に見えて、私を必ず富野に来る様にとの父からの伝言であった。ワンパク少年の私は、母にその事を告げることもなく富野へとその親せきの後を追った。道らしい道もなく橋のない川を渡り、ヒルに咬れて富野に着いたのは夕方であった。

祖母は私を見るなり嬉し涙を流し大変喜んでくれた。いよいよ富野校の二期生である。当時富野はうっ蒼たるジャングル地帯の中に、十軒程まばらに部落を形成し、人々の中には風土病であるマラリヤにかかっている人も居て、子供から大人に至るまで黄色いキニーネという錠剤をよく飲まされた事を覚えている。部落の西側では、今は無き互葺校舎がすでに完成して居りました。

一方桴海の一部には、琉球政府の計画する移民の先発隊がすでに入り開拓に勢を出していた。

この様にして真新しい四十坪程の校舎で授業が行われたのは、私が富野に来てから半月程してからであったと思う。当時生徒数七名で、私の下には二人の下級生がいたと覚えている。学校は出来たものの、学校の環境はほとんど整備されていなかったため、先生をはじめ生徒の皆さんは、午後から石割作業をよくやった。

小学生であった私には重労働であったが、大田先生に励まされてよく頑張ったものである。そうこうしているうちに米原には、移民の二次隊が入り生徒の数も四十名余りになり、富野校のマンモス時代であったと思う。

ワンパク少年の私は、本島から来た生徒の中に標準語がうまく出来ない者もいたので、よくからかったりして先生にしかられました。当時をふりかえると、ワンパク少年であったことだけが脳裏に残っている。

このようにして楽しかった事やつらい想い出を残し、同校を卒業して二十四年に至るが、母校の為に果して何をしたのだろうか、と今になって思える。これからでもおそくはないと母校富野小中学校が三十年の節目を迎えることを契機に頑張りたいと思う。

時折通る母校の前で、子供達にも教えるすばらしい学舎であったことを………。

これからも我が母校富野校の益々の発展を祈念いたします。



三十周年に思う

独立校第十期生 知花孝雄

突然、母校富野小中学校より、「三十周年記念事業期成会結成」の通知を受け、いまさらながら時の流れを感じ、過ぎし日の一コマ一コマがよみがえってきます。

緑濃い太田山林を前に、坂の途中に位置する富野校。その校庭に出て絵のへたな私は、よく山を選び緑一色にぬりたくったものです。また一年先輩の盛政兄さんたちとよく暴れたものです。複式学級であった私達は、クラスがいっしょになり、「げんべい」や「陣取り」をしてよく遊んだものです。特に三、四年生のところ陣取りが盛んで、こちらは十名あちらは先輩で七名ちようどハンディーとしてよかったのかも知れませんが、休み時間になると運動場にて、さっそく始めました。体の小さい双児の弘光君、弘吉君それに清弘君は、スルスルと味方陣地をぬけ木や校舎にみえかくれし、相手陣地の後からチャンスをつかいます。敵は百も承知、しかしながら前方の敵に気をとられ夢中になっているうちにいきなり後から「バンザイ、」と陣地をうたれくやしがつたものです。また、陣の手前で敵に気づき、「うった」「いや、さわるのが早い。」といい合いになったこともしょっちゅうです。戦いは数に勝り、守備軍、攻撃軍また小さな隠密部隊の活躍でいつも

私達が勝ったものです。高学年・中学になっては野球をするようになりました。しかしボールを打てば運動場の西の斜面や、校門右手のガジュマルの根元にボールが転がり、なかなかみつかりません。野球をする時間よりボールを捜す時間が長く、はてはボールのかわりにハブが見つかったりしたものでした。

また、思い出に残る大浜孫裕先生は私がちょうど一年生に入学した時、二代目の校長として赴任されました。当時私達の村は、「村づくりは人づくりから」ということで、教育隣組活動が活発に行われ、毎年学事奨励会が盛大に催されていました。入学した私達や兄さん、姉さん達に、公民館で励ましのノートや鉛筆をおくり、その後招待した先生方と部落の人達は、酒をくみかわしつつ和やかに懇談しました。祝ってもらった喜びで、友達とワイワイ遊んでいるうちに夕方となり、皆がそれぞれの家路につきました。私も弟妹をおんぶした両親と兄に手をひかれ、上部落の我が家をめざし長い坂道を歩いていきました。その小さな後姿に昼間の疲れがでていたのでしょうか。後からおいついた校長が「おんぶしてあげよう、名前はなんていうの。」とやさしく声をかけ、家までおんぶしてくれました。大きな背中中で暖かく、夢見心地で家に着いたのを覚えています。また、知花義信先生は村出身の畑くささのする先生でした。先生の指図に従って二人づつ一組になり使所から水肥をくみ、学校農園のキューリにかけました。みごとなキューリが実り、私達五、六年生だけでは食べきれず、全生徒で食べたものです。また劇の中にもとり入れ、「くさい、くさい。」「くさい、くさいと思ったら、お百姓さんだ。」「働く手それはお百姓さんの手だ。」という呼びかけ劇のセリフを、今で

も覚えています。

私にとって、いろんな思い出の残る母校ですが、復帰の世替りかんばつや台風の影響をうけ、離農する人があいつぎ、さびしい校区を反映し在籍の少ない小さな学校になってしまいました。学校創設期に、父母や先輩達が「村づくりは人づくりから。」といつてがんばってきたことを思い起し、皆んなが母校に目を注ぎつつ富野校の発展を祈ります。

在校中の思い出

独立校第十一期生 石井 洋子

昨年久しぶりに母校の運動会に参加しましたが、生徒数が少なく、運動場が広く感じられ、一抹のわびしさを覚えました。

私が在学中の頃は、児童生徒数も百名を越え、休み時間ともなれば、遊び場を求めて走り回り、文字通り、遊び場の奪い合いでした。

その頃の運動場は、東側には高い傾斜があり、大きな穴もあって現在よりずっと狭かったので、少しでも運動場を拡げようと、凹地へ、サクダ川から石を運んだり、傾斜地を崩して土入れを行ったものです。

その他、学校給食も始まり、給食用の野菜づくりやバナナ園の手入れに励んだり、活気がありました。

当時、一番の楽しみと言えば、バスを貸切って映画を観にシカ

へ出かけることでした。テレビもなく、個人で街へ出かける機会も滅多になかった頃のことですから、文部省推薦の映画が上映されると、学校を挙げて団体見学に出掛けるのです。その日は授業も一校時か二校時で打ち切られるとあって私達にとっては二重の喜びでした。

何年生の時でしたか忘れましたが、映画見学があって、その前の日から嬉しくて、嬉しくて勉強にも身が入らないくらい楽しみにしていたのに、その当日、私達を乗せたバスが、ヨーンの白保屋農場前で故障してしまいました。

修理をするまでそんなに手間どらなかったはずなのに、私達にはとても長く感じられました。

九年前通った母校には数知れず、いろいろな思い出が秘められています。その母校が、今年で創立三十周年を迎える事に、卒業生の一人として嬉れしく思います。

特に富野校が創立された年に、私や私の同級生は生まれました。ですから、母校の歩みは、私の歩みのように思えて、感慨もひとしおでございます。

母校の御発展をお祈り申し上げます。



在学時を思い出して

独立校第十三期生 池原苗子

富野小中学校創立三十周年を迎えるにあたり、卒業生の一人として心からお祝い申し上げます。

母に手をひかれ、セーラー服に真新しいランドセルを背負い校門をくぐって二十余年が過ぎ、創立三十周年を迎える母校に感謝の気持ちでいっぱいです。私が入学する頃には、先輩たちの手で基礎が築かれ整備され、生徒会活動や地域活動も盛んで充実した時期でした。

先輩たちに、下級生の私たちはいつもやさしく守られてきたような気がします。目をとじるとあの頃が彩かに甦ってきます。校門の両側にはヤシの木があり、四季を通して花の絶えない花園があり、少し坂になった通路をのぼると、またでっかいヤシの木が両わきにあり、……そして大きな運動場！。自然を相手に楽しい毎日でした。

私の学年は、男子四名、女子三名の当時一番少人数の学年で、わりと団結し、まとまっていたと思います。良い事も悪い事もいつも一語でした。小学三年生の時、チョーク箱の中にでっかいハチの幼虫を入れ、担任のN先生をおどろかせ寝込ませそれを皆んなで、泣いてあやまりに下宿先まで行ったこと……。

また、授業を放棄して近くの海で遊んでおこられたこと……。その他、漢字の進級テストを競いあったこと。中学生になってからは、校地横にあったバナナ畑での遊びや、ローソク片手に洞窟探険ごっこ……。ローソクの光にゆれる水と石の美しかったことも忘れられない。忘れられないもう二つの思い出。運動会恒例の紅白リレー、一年生から中学三年生までの対抗試合は、ほんとうに息をのんだものでした。それから、高校受験を目前に担任のK先生宅での数日間の勉強会、そんな時奥さんの作ってくださったソーメンチャンプルーのおいしかったこと。その味は今でも忘れられません。などといったことが走馬燈のように思い出されます。そんな楽しい思い出を残せるのも、創設時の苦労された先生方や、先輩方のいしずえがあったればこそだと頭の下がる思いです。(創設当時のことは、父母や兄弟達から聞かされ、また、旧校舍跡や宿舍跡を見るにつけしのばれる。)

地域と学校とが一体となった教育活動も、当時は盛んでした。今も続いているかどうか知りませんが、年一回の学事奨励会。部落の方や両親、先生たちが一同に会し、児童生徒への勉強への励まし。ノート等の学用品やお菓子をいただくことが楽しみでもありました。また各隣組活動も活発で、夏休みのラジオ体操はもちろん、奉仕活動や作業、それに隣組対抗の進級テストもあり、他の組に負けてなるものかと競い合ったものでした。それから、私達の地域に先生方がいつもいらっしやうったということは良かった。校舎内の宿舍や、民家を借りての住まいでしたので、先生方と多く接し何でも語り合い、兄弟や親子のように付き合いができ、何でも相談できる関係であったことです。現在は交通の便が良く

なり、先生方のほとんどが自宅から通勤されている様子で、少し寂しい気がします。

本当の教育はへき地にあるノとよく言われますが、ほんとにそうだと思います。ひとりひとりを見つめ、大切にし、のばしていく。現代の社会問題でもある校内暴力や怠学、登校拒否などおこりうるわけがありません。

まだ三十年という若い学校ですが、そこで学び育ったことにはこりもち、三十年前のともしびが絶えぬよう我々は守っていかなければならぬ責任があるように思う。

母校よ、永遠に栄えあれ！

母校の思い出！

独立校第十四期生 菊池幸子

富野小中学校三〇周年おめでとうございます。この非常に、めでたい創立三〇周年記念誌発刊にあたり、原稿を依頼され、不安に覚えながらもお祝いさせていただけると喜び勇気を出して書くことにしました。

早いもので、私が富野校で学び巣立ってやがて十二年になります。振り返ると楽しかったことや、つらかったことが、脳裏をよくよぎり今では、楽しい思い出となり又励みとなっています。

小学校入学は、男二人、女六人でした。小さい時からの幼な

じみ同志で、チームワークもとれて兄弟のような雰囲気と共に学び合ったことを覚えています。

私の住んでいた所は、大田部落です。「大田山林つらなりて」と校歌にもあるように歩けど歩けど畑ばかり低学年時代はとてつらい道のりでした。当時我が家には、自家用車があり雨の日や遅刻しそうな時は父が部落の生徒を学校まで運んでくれました。父にとっては負担だったと思うが、私にとっては、「雨が降らないかなあー」とまちどおしく又どんなにありがたかったことでしょう。

小学校を入学し中学校を卒業するまでの間私の悩みの一つは運動会でした。子ども心に「のがれたい、かくれたい、雨が降ればいいのに」とどれだけ神に願った事でしょう。それにもかかわらず晴天に恵まれ毎年盛大な運動会、入学して卒業するまで「ラスト」という記録は、富野校の歴史に刻まれていることでしょう。恥かしいあまりですが、運動会を通し、勝ち負けよりも何事に対しても最後まで頑張りぬくことの尊さを知らされたように思います。又中体連主催のバレーボール大会にも出場しました。小規模学校だけに上手、下手関係なく、全員が選手でした。仲本英博先生を中心に夜までかかった厳しい猛練習の結果勝ちとった一勝は「小さくても皆が力を合わせて頑張ったらできる」という勇気も与えて下さいました。

卒業の年には、志喜屋清先生の指導のもとで力を合わせて池づくりや、ガジュマルの植樹、そしてアルバム作り、写真は、白黒ですが他校アルバムに負けない個生あふれるものが仕上がりました。又、制服ほしさに上原美代子先生に相談すると、きもちよく

相談ののってくれ、冬には、すばらしい制服を着て卒業する事ができたことは、今でもはっきり記憶にのこっています。卒業した今、振り返ると当時の先生方の御苦勞を思いありがたく感謝のあまり成人した今日学生の頃の私達の足跡となっています。

「高校入試の際は、先輩達の百パーセント合格という記録を守ろうと頑張り又励みとなり、私達も全員が合格することが出来ました。

富野校で学び、巣立った今、母校は私の誇りです。恩師の先生ありがとうございました。富野校の名が石垣市全域あるいは各県に知られるように、先輩、後輩が共に手を取り合い頑張ってください。

今後共先生方御指導、御鞭撻をよろしくお願い致します。

この三〇周年を基にますます富野校が発展していくことを期待します。

